猿新聞

編集責任者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区:220部
つつじが丘:430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
（9地区）
名張市議会:20部
名張市役所:30部

獣害はヒューマンエラー

獣害対策は、昔から現代まで基本的には変化なく受け継がれ、今に至っていますが、その間に起こっている農業政策の大転換。これに伴うミスマッチはなかったのか？。近年の研究や各地の実証を通じて、正しく見直し次世代に渡す必要があります。

約１６．０００年前、私たちの先祖縄文人は日本列島に現れ、狩猟採集社会を構築。縄文時代の日本の人口は何千年もの長い間、20万人程度にとどまっていたと言われています。これが狩猟採集活動で生きていけるギリギリの人口だったと考えられています。

狩猟採集民であった縄文人は野生鳥獣を、貴重な獲物として巧みに利用しながら暮らしてきました。以降、狩猟採集社会は人類が農耕を始めた弥生時代まで続きました。

稲　作農業が本格的に始まると、これまで山の幸であったシカやイノシシは、害獣として人々を悩ますようになり、野生鳥獣との軋轢（あつれき）が高まっていったのです。以降、現代まで膨大（ぼうだい）な時間を、私たち人類は野生鳥獣と争ってきたのです。昔は野生鳥獣による農作物被害は人の生死に関わるほどの深刻な問題であったのです。それは各地に残るシシ垣など様々な資料から窺うことができます。

近年、獣害は各地で急激に深刻さを増しているので、新しい問題と考えられがちですが、獣害は人間が農業を始めた弥生時代からある問題なのです。それでは近年になって獣害が深刻になってきたのはなぜでしょうか。

要因は人の暮らしが変わってきたことにあると思います。特に中山間地域では、人口減少による担い手不足や農業従事者の高齢化が進んで、人圧が大きく低下しています。

一方、対策の基本としての、追い払い・囲む・捕獲は、昔から現代まで基本的には変化なく受け継がれ、今に至っていますが、その間に起っている対策のミスマッチを、近年の研究や各地の実証を通じて、正しくとらえ検証する必要があります。

近代に入り古代より大きく変わったことと言えば、全ての野生鳥獣の個体数が桁外れに増加したことや、古代には姿が見られなかった外国由来の生き物が増加し生態系に悪影響を及ぼしていることです。加えて農業政策の転換。保護政策や拡大造林、減反政策など、農・林業政策が大きく変化をしています。

これらが要因となり、獣害問題に大きな影響を及ぼしているものが多々あります。現実に保護政策や拡大造林はシカなどの個体数激増につながり、減反政策は耕作放棄地拡大を招（まね）き、イノシシなどの温床となっています。

これは人間が自然界を自分たちの管理下に置こうという誤った独善的な考え方から起こっていることなのです。

今後の獣害対策として重要なのは、人口流失・少子高齢化高齢化などにより疲弊している中山間地域の活性化です。獣害の最前線、中山間地域の活性化は、是非とも必要なな獣害対策です。

人間のやることには多くのミスマッチやヒューマンエラーが付き物です。近年衆目を集める、砂漠に木を植えようとする砂漠緑化運動を皆さんご存じのことと思います。この発想には両手（もろて）をあげて賛成の方は多いでしょう。だが、よくよく考えてみるとこれは環境破壊。ヒューマンエラーにつながります。砂漠にはその環境にだけしか生息できない動植物がいて、砂漠を無くすことは、そこに棲む生物（いきもの）を絶滅させることを意味します。つまり、砂ばかりの世界も自然の生態系のひとつです。砂漠を人工的に緑化するということは、自然の掟に背く行為で大きなミスマッチなのです。

人間は、今や驚異的に発達した科学技術の力によって、全ての生き物の生命と生存を支配するに至っています。人間の独善的な行為が大規模な自然破壊につながり、全く意図しない出来事が起き、生態系の更なる悪化につながる可能性も人間の手の中に委ねられているのです。自然界を支配する上で重要なことは、自然の中では人間も一動物であると言うことを忘れないことです。

農業をめぐる野生動物とのせめぎ合いは古代からあったことですが、その中かでの対策エラーが積み重なり現代では獣害問題はヒューマンエラーと言われるまでになっています。ヒューマンエラーは、人間が原因で起こるエラーで、多くの場合、人間が行うべき作業を適切に行わないことが原因として発生します。

野生鳥獣による農・林・水産被害を解消するには、ヒューマンエラーを早急に改善する以外の道はありません。

宇陀市龍口区では集落を取り巻く緩衝帯を設置。果たしてこれで獣害は解決？

森林は国民共有の財産である！

都市住民の犠牲の下（もと）で農山村を優遇しているとか…、都市と農山村との間には行政上の諸問題がくすぶっているなど農山村と都市の断絶が指摘されてます。

一方、山村では 急速に進む都市への人口流出で過疎化が進展し、加えて高齢化の波は、野生動物と人との緩衝地帯として機能してきた里山の荒廃を加速させ、獣害問題が深刻化しています。里山は、歴史的にも重要であり、未来においてはもっと大切なものとして、保全されていかねばならない農山村の宝物ものなのです。

中山間地域は、日本の農地面積の約４割を占めていますが、平坦部が少ないなど立地条件に恵まれず農業生産性が低く、農業所得・農外所得ともに低い地域です。今後、いっそうの人口減少や都市への人口集中化が予想される中、大都市に住む人々は、中山間地域に、どのようなイメージを抱いて居るのでしょうか。ある時期までは、都市の多くの人々が、農山村から流入した人たちであったため、農山村のもつ本来的な困難さに対して共感を抱いていたように思います。だが、都市二世、三世が増えている現在、農山村と都市はどのように関わっていけばよいのか考えてみたいと思います。

農山村と都市は、森林を介して河川で結ばれ、その恩恵を分かち合って現在に至っています。農山村には、米や野菜などの生産の場としての役割と、水田に雨水を一時的に貯留し、洪水や土砂崩れを防いだり、生物多様性の保全や、また、美しい農村の風景は、私たちの心を和ませてくれるなど大きな役割を果たしており、その恵みは、都市住民を含めてお金では買うことのできない国民全体の宝物です。

このように日本の農山村は国土保全機能や水源涵養（かんよう）機能を有し下流域の街々に対し大きく貢献しているのです。

拡大造林以降、日本

チョット一服

ホタルとカワニナ

ホタルの季節は過ぎましたが、近年、夏が近づくとホタルの話題で持ちきりになります。だが、肝心のホタルの餌となるカワニナの話題は今一つです。今、カワニナはなど川に棲む水中生物は農薬や汚染水の流入などで激減しています。3方コンクリートの川が多く棲む場所がないということも減った原因といわれています。カワニナは雑食性で、歯舌という部位を使って、石の上にはえている藻類などを少しずつ削り取って食べています。ゲンジボタルやヘイケボタルの幼虫は代表的な外敵です。ゲンジボタル幼虫は、流れのあるきれいな川に生息し、そこに生息するカワニナを餌としているのに対し、ヘイケボタルの幼虫は、水田に引き込んでいる少し汚れた水路や田んぼで生息し、タニシやカワニナを食べていますが、ゲンジボタルはタニシは食べません。ホタルは成虫になると何も食べません。幼虫時代に食べたカワニナの栄養分だけで生き続けます。この蓄えられた栄養分を消化しきってしまった時に寿命がつきるのです。オスは、メスよりも体が小さいため、幼虫時代に食べるカワニナの量が少ないので、メスよりも早く死んでしまいます。ホタルは成虫になると唯一口にするのは、「夜露（よつゆ）」だけなのです。だから、成虫は排泄はしません。
生きている妖精なのです。

の森林は木の伐り過ぎによる危機ではなく、木を伐らなくなったことによる歴史上初めての危機を迎えています。

森林の荒廃というと、禿山（はげやま）のような状態を想像する方が多いと思いますが、近年議論されている「森林の荒廃」とは、手入れをされなくなった山に木々が鬱蒼（うっそう）と茂り、地面まで日光が届かず草が生えなくなった状態を指しています。その原因は、近年、木材価格の長期低迷などから人工林の経済的価値が低くなり管理経費が賄（まかな）われないことなどから林家の経営意欲が低下し管理放棄されているからです。

森林の荒廃の恐ろしさを都会の人と共に真剣に考えるべき時ではないでしょうか。

森林は私たちが暮らす農山村を包み込むように広がり、樹木は大地にしっかりと根を張り、「緑のダム」と呼ばれて、洪水などの自然災害から農山村は勿論（もちろん）、下流域の街々を守る国土保全の役目を果たしています。

全ての生命の基盤である大気（酸素）と水は、森の植物や海のプランクトンなどの光合成によってつくられています。森林の土壌には透水生、保水性があり、大量の雨水を蓄え、ゆっくりと地下へ浸透させ、その過程で不純物などを、ろ過・浄化し都市部へ流す、水源涵養機能があります。

さらに、人間社会は自然（森林）の恵みの上に成り立っています。毎日私たちの食卓に運ばれる米、肉、魚、野菜などの食料はもちろん、新聞や本などの紙製品、木材、医療品なども自然から恵みを得ています。

名張市につならなる鈴鹿山系。
ここから流れる水は、宇陀川・木津川を経て
大阪に届く。

このように私たちの暮らしに欠かせない衣食住は、自然に由来するものであふれています。呼吸に必要な酸素は人工的にあるものではありません。飲料水も、食べ物も全て自然界由来のものです。森も、植物も、植物を食べる動物や家畜も、全てが自然界の恵みのおかげで生存しているのです。

こうした恵みを恵みとも気付かず、山で暮らす人も、大都会に住む人も当り前のように暮らしているのです。

しかし、今や日本の森林は荒廃し野生鳥獣の棲めない状態にまでになっていて鳥獣害の要因につながっています。また、山が荒れることにより生物多様性も失われています。

洪水時、流木による被害が拡大し、森林が今では災害の原因の一つに数えられるようにまでなっています。

地球温暖化など地球レベルでの環境問題が取りざたされていますが、今年の夏は南は沖縄、北は北海度と軒並み35度越えの猛暑が続き地球温暖化現象を肌で感じる毎日です。

森林には 地球温暖化防止機能があります。森林は光合成により、大気中のCO_2を吸収し、酸素を放出しながら炭素を樹木に貯え成長します。さらに、木材として利用されることで引き続き炭素を貯蔵することに加え、木材を燃料として利用することにより化石燃料の消費を抑制することにもつながります。

これまでのように森林所有者だけに森林保全を任せるのではなく、森林は国民共有の財産という基本理念のもと、恵み豊かな森林を守り育て、次の世代へしっかりと引き継ぎ、国民みんなが森林の持つ恵みを十分に享受（きょうじゅ）できるようにするため、これからは国民みんなで森林を支えていく、システムの構築を急ぐ必要があります。

私たちが安心して暮らせる環境は、自然によって守られているということを是非知ってほしいのです。

ちなみに、三重県では「災害に強い森林づくり」と「県民全体で森林を支える社会づくり」を進めるため、平成26年4月1日から「みえ森と緑の県民税」を導入しています。

サル出没状況

ニホンザルは暑さには弱く、熱中症で死亡することもあるようです。インドでは、熱波に見舞われて多数のサルが死ぬというニュースが入ってきています。

サルの熱中症対策ですが動物園などでは、ミストなどで対策している所もありますが、野生のサルは暑さを避けるため、木陰や岩陰で暑さを避けたり、人と同じように水浴びや水を飲んだりして水分を補給してます。最も暑い日中は、比較的涼しい奥山に潜み、採食は日の当らない早朝と日の落ちた夕方に集中しています。

Ａ群の動向

（古川さん寄稿）

Ａ群は、7月中旬～8月中旬は、ほとんど上比奈知・下比奈知に集中しています。

この時期、両集落には安全に腹いっぱい食べられる物農作物があるからです。特に今年の夏は、猛暑が続き畑には人影がなく無防備状態になっています。夏場のサルは、日の当らない早朝と日の落ちた夕方に採食が集中しますので、その時間帯だけでも畑を見回り、柵などの点検をしましょう。近辺の奈垣にも時々出没しています。この状況は毎年稲刈りが終わる頃まで続きます。

問題のつつじが丘のハナレザルの件ですが、2頭の内問題を起こしていた「抱きつき猿」はいなくなりました、多分駆除されたのではと思っていますが、取りあえず一安心です。もう一頭のハナレザルと思われるのが時々出没しているようです。

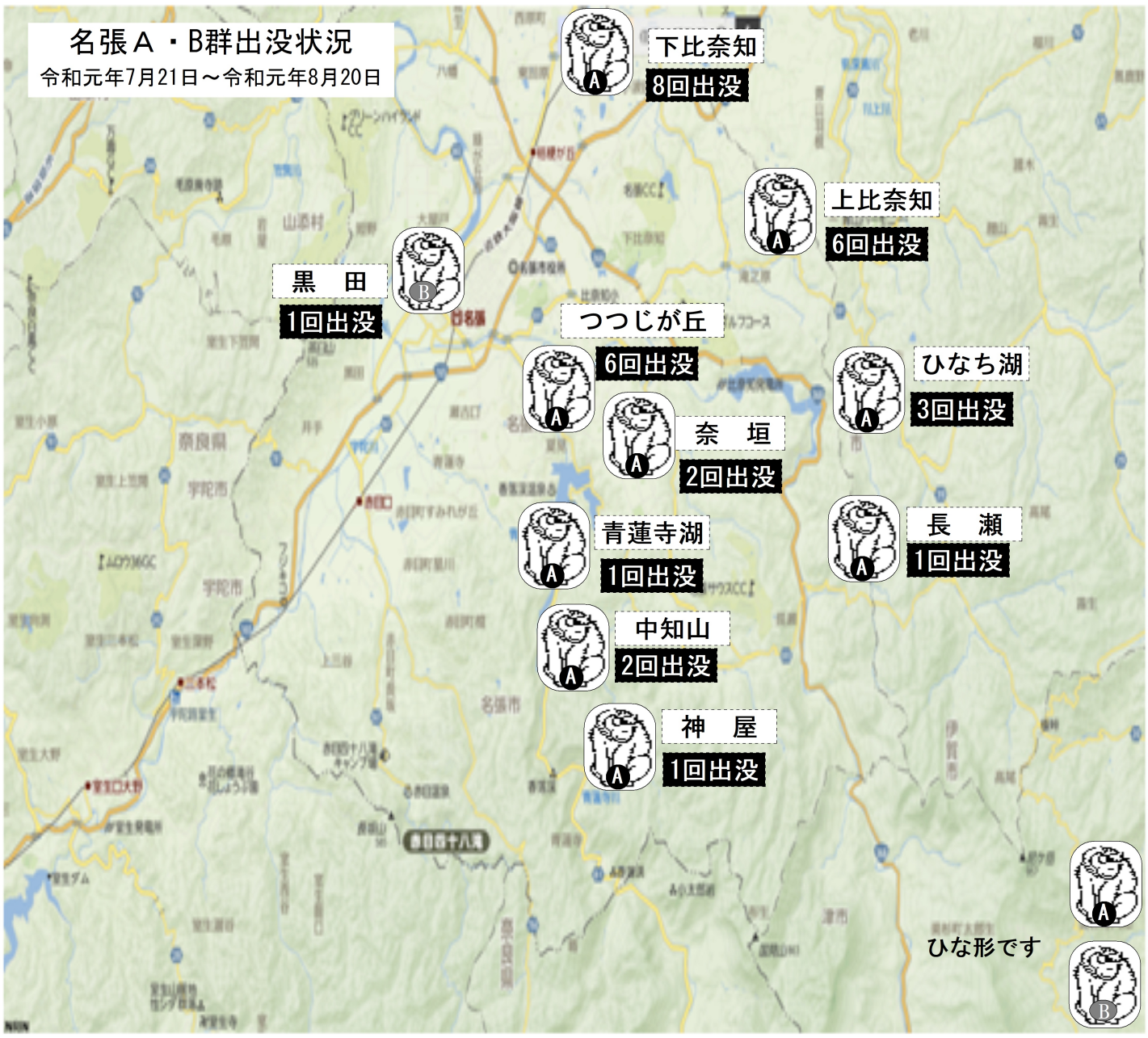
Ｂ群の動向

名張市農林資源室では、発信器の取り付けを実施するため、サルの捕獲を実施していますが、いまだ朗報は聞こえてきません。

発信器を装てんするサルは、どんなサルでも良いというものではなく、群れの中でリーダー的なメスで比較的健康状態の良い個体が望ましいです。また、餌の多い夏場の捕獲は困難です。

8月6日、黒田の中森さんからトウモロコシ被害の連絡がありました。（上の写真参照）被害は8月4日の早朝らしいということです。

10個ほどのトウモロコシが綺麗に食べられていました。この状況から推してハナレザルの犯行のようです。

錦生北部は前々からサルの被害が比較的に少ない地域だったのですが、今後、ハナレザルの横行が増える時期になるので十分な注意が必要です。

Ｂ群には事前に居場所を察知する「サルドコモ・システィム」が作動していない状態が続いていますので、くれぐれもご注意のほどを、お願いいたします。